

## 災害活動報告

# 「東日本大震災 災害活動報告」

宮城県東松島市消防団 団長 阿部 賢一



我が消防団は、平成17年4月1日に旧矢本町と旧鳴瀬町が合併し、東松島市が誕生し、それに合わせて東松島市消防団が誕生しました。団員数655人（平成23年3月11日時点、殉職者8名を含む。）で、分団数は11分団で構成されています。

本市は、宮城県の県都仙台市の北東に位置し、沿岸部には広大な太平洋が広がり、東北地方の中では比較的温暖で、降雪の少ない地域です。市域の東部には肥沃な田園、中央部には四方を一望できる桜の名所「瀧山」を中心とする丘陵地があり、また、西部は特別名勝「松島」の一角を占めるなど、風光明媚な景観が広がっていました。

平成23年3月11日午後2時46分、東北地方太平洋沖地震が発生し、未だかつてない大地震と巨大津波に襲われ、数多くの生命、そして財産が奪われました。市内での遺体収容数は1,047名（平成24年2月1日現在）、行方不明者58名（平成24年2月1日現在、認定死亡46名含む。）という甚大な被害をもたらしました。今回の巨大津波により、市の建物用地の65%が浸水し、大曲浜、野蒜、宮戸地区等の沿岸部では、建物そのものが流出してしまいました。住家の被害状況は、約60%が大規模半壊以上の被害を受け、多くの市民が住家を失い、応急仮設住宅で暮らさざるを得ない状態となっています。震災前の人口は43,142人、世帯数は



3月25日宮戸地区

15,080戸（平成23年2月1日現在）でしたが、現在の人口は40,708人、世帯数は14,681戸（平成24年2月1日現在）です。

私は、その日、早朝からビニールハウスの中でキュウリの栽培管理を行っていました。午後4時に市長と会う約束があり、その準備のために自宅に戻った時に、今までに味わったことの無い激しい揺れに見舞われたのです。家族へ高台に避難するよう指示し、3kmほど離れた市役所に車で急行しました。

市役所に到着した後、市災害対策本部へ入り、庁舎の発動発電装置が起動され、テレビが伝えるニュース、消防吏員からの情報を耳にし、「これは大変なことになる。」と予感しました。

毎年行っている市総合防災訓練では、分団から1名の連絡員を市災害対策本部へ使送することと義務付けていました。団員からの報告は、深刻な内容ばかりでした。やはり、沿岸部の分団からは連絡員は来ず、ライフラインが途絶えた中、「唯一の通信手段である防災行政無線（移動系）」を使用し、団幹部や消防車両に装備している受令機で避難誘導、水門を管理している分団への水門閉鎖、そして、内陸部の分団には、沿岸の分団を支援するよう指示しました。

本市における津波第一波到達時刻は、地震発生から約50分後と記憶しています。テレビ中継では、



嵯峨浜



野蒜小学校体育館

名取市や気仙沼市の状況が映し出され、市内沿岸地域に置き換えると悪寒と緊張が走りました。

間もなく、「野蒜小学校校庭にたくさんの遺体を発見した。」「本土と宮戸島を結ぶ橋が落ち、孤立状態になった。」「隣接する石巻市では、集落が流出した。」など、消防吏員から伝えられました。現実が突きつけられました。断片的な情報だけで、想像のみが先行し、市内の被害の全貌は見えてきません。自分の無力さを痛感しました。

日の出とともに、より多くの、より詳しい情報が入りました。私は、一刻も早く団員を現場に送り込むことを決断しました。体制を整え、人命救助と行方不明者の捜索を団員へ指示しました。我々の行く手を阻む瓦礫を東松島市建設業協会と自衛隊の協力を得て、撤去し、通路を確保しようとしたのですが、現場周辺は津波による水が引かず、多くの時間を費やしました。

活動中、多くご遺体を発見しました。宮城県警察本部等と協議し、団員に遺体搬送班の編成を指示しました。団員の誰しもが経験したことのない初めての任務でした。搬送車両に団員の個人所有の軽トラックを使用させ、ご遺体を必ず遺族の元へ返すために身元確認を徹底させました。この遺体搬送班による任務は、3月いっぱい続きました。未だ、58名（平成24年2月1日現在）の市民の行方が分からず、家族からも、早く見つけ出して欲しいという要望も後を絶ちません。延べ7,811人の団員を出動させ、現在も定期的に捜索を続けています。

我々は、東日本大震災という未曾有の大震災を経験しました。日頃の訓練の重要性、さらに二次災害の防止を常に考えていかなければなりません。市民の前に立ち、避難指示を出すことも大切であります。

しかし、今回、消防団活動中、8名の団員の尊い人命が犠牲になってしまいました。団員もか



大曲浜地区を捜索する団員

けがえのない市民の一員、家族の一員であること忘れてはいけません。団員の全てが被災者です。大切な家族、財産、故郷、仕事を失った者、その団員に対して、時に鬼となり、厳しい状況下で命令を出しました。逆に、団員自身の生命を守るために、勇気ある決断も団長として大切であると再認識しました。

そして、今後、このような悲劇を繰り返さないために、今回の大震災を後世に伝えていくことも消防人としての使命であり、今を生きる我々の責務であることは間違いありません。これから、この土地で生まれ、暮らしていく人々のために、いかに災害から身を守っていくかを伝え続けていきたいと考えています。

また、このような機会をいただいた(財)日本消防協会をはじめ、消防関係団体、日本全国、そして世界各国からの温かいご支援とご協力に深く感謝を申し上げ、活動報告とさせていただきます。



消防殉職者慰霊式